

ゴール朝と 11-12 世紀のアフガニスタン

稲葉 穰

はじめに

ゴール朝は 11 世紀にアフガニスタン中央部から勢力を伸ばし、ガズナ朝やセルジューク朝と戦いながら領域を拡大していった王朝であり、またガズナ朝の後継者として北インドに本格的に侵攻した王朝である。この王朝は最盛時にはガズナ朝の最大版図に匹敵する領域を支配したが、最盛期そのものはそれほど長くはなく、その後西方においてはグズのテュルクやホラズムシャー朝に敗れ衰退する。一方東方においては着実に成功をおさめ、13 世紀以降北インドにイスラーム政権が樹立される礎を築いた。それゆえガズナ朝に続いてインドの本格的イスラーム化の扉を開いた政権として一般に言及されることが多い。しかしながらこの王朝については実は多くの事柄が未だ明らかにならぬ謎として残っている。

この時代の東方イスラーム世界について多くの重要な研究を行ったイギリスのボズワース C. E. Bosworth はかつて「(ゴール朝拡大の) ダイナミズムの底流にあった力は未だ十分に理解されてはいない」と述べたが [Bosworth 1968: 159], その最も大きな要因は資料の不足である。このボズワースの言葉が発せられたのは今から 30 年余りも前になるのだが、それ以後実は研究に関わる資料状況はほとんど改善されていない。1970 年代末までに行われた考古学的調査はアンドレ・マリク A. Maricq によるジャームのミナレットの「発見」という目覚ましい成果をあげ、それとともにいくつかの新しい事実を明らかにしたが、それらも調査研究が本格化する前に旧ソ連軍の侵攻とその後の内戦のために頓挫してしまった。それゆえ現在筆者が持っている資料も相変わらず零細なものであることを最初に告白しておかねばならない。それにもかかわらずここであらためてゴール朝にかかわる幾つかの問題を取り上げようとしているのは、筆者の現在の関心の所在のゆえである。筆者は前近代のアフガニスタン地域の歴史を理解するための柱として、いわゆる「アフガン山塊」(後述)を巡る道を位置づけるという作業を近年いくつかの論文において続けてきた [稲葉 1990, 1991, 1994]。その過程で 7 世紀から 11 世紀までの政治的あるいは地理的状况に関しての一応の整理を行った。本稿においては 11 世紀末から 12 世紀にかけて、すなわちゴール朝時代のアフガン山塊を巡る道の状況というものを考察し、7 世紀以降のこの地域の歴史を通時的に理解する一助としたいと考えている。

しかしながら前述のようにゴール朝にまつわる謎は数多い。まずイスラーム化以前のゴー

ルの状況だが、ボズワースに専論 [Bosworth 1961] があるにもかかわらず未だ不明な点が多い。また王権を握った家系であるシャンサバーニー Šansabāni 家の起源、その権力掌握過程の問題、11 世紀後半における爆発的拡大の背景、そして王都とされるフィールーズクーフ Firūzkūh の所在の問題。これらの問題のいくつかに関してはジャームのミナレットを調査したマリクが報告書 [Maricq et Wiet 1959] の中で提出した仮説をもとに多くの議論があり、未だ決着していない。もちろんこれらの問題全てに関して筆者が現在答えを準備できているわけではないので、ここでは当時のゴール地方の地理的政治的状况を文献資料や考古資料によって再確認 / 再考し、地理的政治的側面からゴール朝の特性に光をあててみたい。

I ゴール朝以前のゴール

まず最初にゴールという地域の地勢について述べ、あわせて本稿の前提条件をいくつか確認しておきたいと思う。図 1 に示されるように、ゴール地方は現在のアフガニスタンの中央部を占める山岳地帯の中にある。この山岳地帯は東のカラコルム山脈やヒンドゥークシュ山脈といった山並みの西端にあたり、地勢的にヒンドゥースターン平原とイラン高原を分かつものである。Kūh-i Bābā, Safid Kūh, Siyāh Kūh, Firūzkūh といったいくつかの山脈の

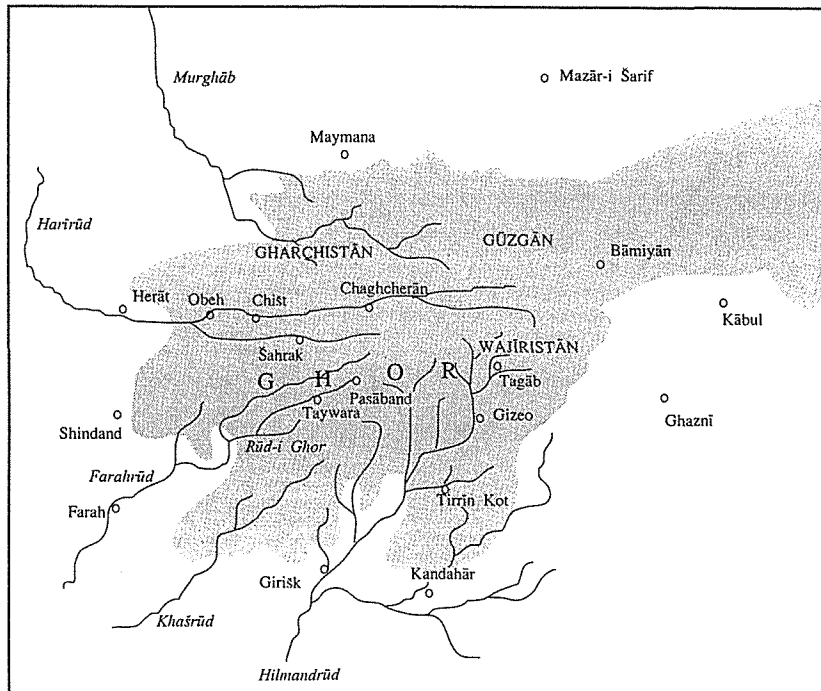


図 1 ゴール地方全図

複合体なのだが、まとめて「アフガン山塊 Afghan Massif」などと呼ばれたりもする (cf. Bombaci 1957)。本稿でも便宜上この「アフガン山塊」という名称を用いる。

このアフガン山塊の中央を貫くのが西流してヘラート Herāt 地方を潤すハリールード Harīrūd であり、そのハリールードの南側の地域を歴史的にゴールと呼び慣わしている。ちなみに内戦前のアフガニスタンの行政区分でもゴールはだいたいその辺の地域にあたる。標高 3,000 メートルを越える山々が屹立する険阻な地域で、現在でも外部からのアクセスが難しい場所であると言われる。そのあたりの事情については 1955 年に京都大学学術調査隊の一員としてゴール地方深くわけいった梅棹忠夫氏の名著『モゴール族探検記』[梅棹 1956] によって広く知られているところでもある。

10 世紀に書かれたアラビア語地理書であるイスタフリー al-Iṣṭakhri の *al-Masālik wa al-Mamālik* やイブン・ハウカル Ibn Ḥawqal の *Kitāb Ṣūrat al-'Arḍ* は、ゴールは西でヘラートと接し、南でスィースターン Sīstān、アルズ・アルダーワル 'Arḍ al-Dāwar (ペルシア語ではザミーンダーワル Zamin Dāwar) と、東はバーミヤーン Bāmiyān、グーズガーナーン Gūzgānān、北はガルチスターン Gharchistān と境を接しているとする [Iṣṭ.: 272; IH: 444]。

やはり同じ時期に書かれた地理書であるムカッダスィー al-Muqaddasī の *Aḥsan al-taqāsīm* によれば、このゴールの山地からは大きな河が四本流れ出している [Muq.: 329-30]。一つは前述のハリールード。二つ目は南流してスィースターン方面へ流れるヘルマンドルード Hilmandrūd、三つ目は南西に流れてフェラへ到るフェラルルード Farahrūd。これは途中でタイワラ Taywara 方面から流れてくるルード・イ・ゴール Rūd-i Ghūr と合流する。四つ目は北西へ流れメルヴ Marw へと向かうマルヤンドルード Maryandrūd で、これはムルガーブ Murghāb を指すと考えられる。もちろんこれらの河にはいくつもの支流があるので、それぞれハリールード水系、ヘルマンドルード水系、フェラルルード水系、ムルガーブ水系と呼ぶ方がよいだろう。ゴール地方がハリールードの南側であるのならば、ここであげられた四つのうち、ムルガーブ水系を除く三つがゴールの山岳地帯から流出する河川だと考えていい。

ゴールのような山岳地帯においては、主要な交通路は当然のことながら河川が山を刻んだ地形に沿って成立すると考えられる (もちろん後述のような例外もあるのだが)。一方歴史的に、特にこの 10 世紀頃に先にあげたゴールの周辺地域からゴールに到る道には大きく三本が数え上げられる。一つはヘラートからハリールード沿いに東行する道。二つ目は現在のカンダハール Kandahār (Qandahār) あたりからアルガンダーブ Arghandāb、ヘルマンドルード沿いに北上していく道。三つ目はバーミヤーン、カーブル Kābul、ガズナ Ghazna といった東部アフガニスタン地域から西へ向かう道である。第一の道は先に言及したアラビア語地理書に現れるもので、そこにはヘラートからゴールの西の玄関の Khašt/Chišt までの旅程も記録されている [Iṣṭ.: 285; IH: 457; Muq.: 349]。また現代でもハリールード沿い

にヘラートからカーブルへと抜ける道が中央アフガニスタンを横断する幹道として存在している [Dupree 1977]。二つ目の道も地理書に見えるもので、たとえばムカッダシーにはブスト Bust からダーワルを経てゴールに到る道が記されている [Muq.: 350]。三番目の道は地理書には現れない道だが、ガズナ朝の第5代スルタンであるマスウード Mas'ūd が1040年ダンダーナカーン Dandānaqān においてセルジューク族に敗れてガズナへ敗走した際に用いられた道 [TB: 836-46, 851] であり、ガズナ朝に関する年代記である *Tārikh-i Bayhaqi* やゴール朝についての最重要資料である *Ṭabaqāt-i Nāṣiri* などでも何度かこの道の存在が言及されている。ただしかなり険しい道であつたらしく、軍の移動等に用いられた形跡はない¹⁾。1954年岩村忍氏がカーブルからハザーラジャート Hazārajāt に入る際に通過した道が、この道の一部にあたると考えられる [岩村 1978]。

以上のような、三つ大きな河川とそれに沿う幹道との存在に対応させて、ゴールの山岳地域を以下のように大きく三つに分けることができるだろう。

- ・第一エリア：ハリールード水系
- ・第二エリア：ヘルマンドルード水系（南東部）
- ・第三エリア：ルード・イ・ゴール水系（タイワラ近辺）およびファラルード水系（南西部）

これらの地域が本当に一つのまとまりとして歴史的に動いてきたのかどうかについては、残念ながら資料の不足により明言できないが、すくなくとも地形、自然環境からはこのようなおおまかな分類ができるのではないかという点を、本稿の内容の一つの前提として提示しておきたい。

II シャンサバーニー家の歴史

1 シャンサバーニー家の起源

さて、ゴール朝とよばれる王朝を形成したのは、ジューズジャーニー Minhāj al-Dīn Jūzjāni の *Ṭabaqāt-i Nāṣiri* においてシャンサバーニー家と呼ばれている家系である。この地域の歴史に関して極めて重要な創見を数多く提出しているマルクヴァルト J. Marquart は、これを šansabān < šansab < šanasp < všnasp < gšnāsp と復元し、イラン系の起源を持つと推測しており [Marquart & de Groot 1915: 289]、ミノルスキー V. Minorsky もそれ

1) 筆者は [稲葉 1990: 667] において、この道がガズナ朝時代いかなる軍事遠征にも用いられなかったと記したがこれは正確ではない。実際はセルジューク朝との戦いの最中、ガズナから派遣された司令官とその随行の小部隊がこの道を利用してホラーサーンに移動している [TB: 654]。ただし大規模な軍事行動、遠征、という意味ではこの道は使用されなかったと言っている。

なお Bosworth 1961: 119 参照。

に従っている [Minorsky 1982:333]。もしこの推測が正しいのならこの王家をシャナスブ家と呼ぶべきなのだろうが、本稿ではジュズジャーニーの表記に従ってシャンサバーニー家と呼ぶことにする。

Ṭabaqāt-i Nāṣiri は、ファフル・アッディーン・ムバーラクシャー・マルヴァズィー Fakhr al-Dīn Mubārakshāh Marvazī²⁾ に依拠してこのシャンサバーニー家が全アラブの父 Tājir Barsad に遡るとしている [TN: 319]。試みに *Ṭabaqāt-i Nāṣiri* の記述に従ってターズィーウ以降の家系を図にしてみた (図2 参照)。ここでまず注目されるのはターズィーウの曾孫にあるとされるザッハーク Ḍaḥḥāk の存在である。ザッハークは周知の通り *Šāhnāma* にも現れる蛇を身体から生やした王であり、魔術を用いて千年の間君臨したとされる人物である。一般に家系図というものが、それが本物であれ捏造であれ、なるべく立派な人物や王様に自分の家系を結びつけることにより、権威やレジテマシーを増すという目的で飾られるのだとするなら、ここでイランの伝説的な悪役であるザッハークが登場するのは極めて不思議なのだが、この点に関してはすでにマルクヴァルトが、ザッハーク、すなわちゾロアスター教の悪役である龍アジ・ダハーカが閉じこめられているダマーヴァンド山とこ

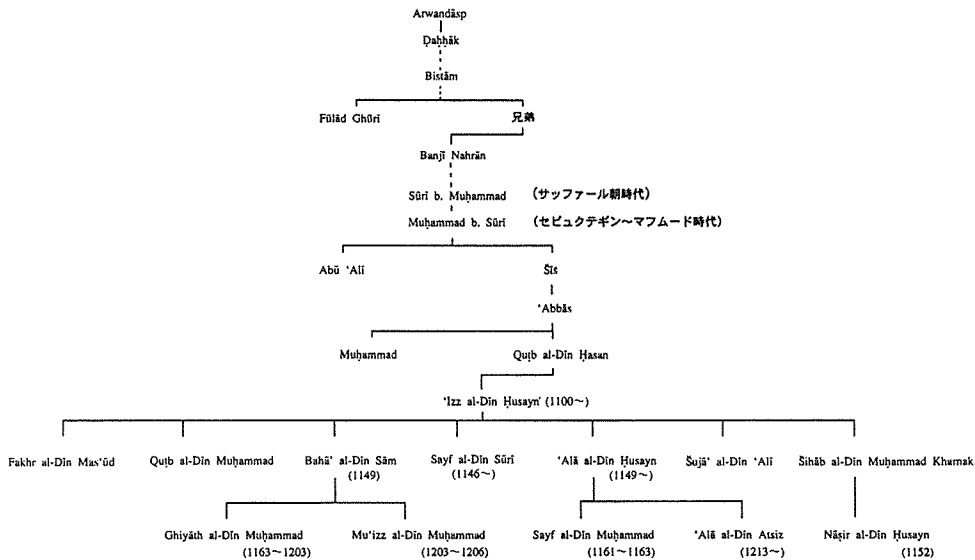


図2 シャンサバーニー家の系譜 (*Ṭabaqāt-i Nāṣiri* による)

2) このファフル・アッディーン・ムバーラクシャーは、ガズナに生まれ、*Ādāb al-ḥarb wa al-šujā'* という君主鑑の作品を書いてデリーのスルタン・イルトゥットミシュ Iltutmīsh (在位 1210-35 年) に献呈したことで知られる著述家である。ジュズジャーニーがひくゴール朝の王統についての著述は、彼のもう一つの散文作品である *Šajara-yi Ansāb* にあると考えられる。Shafi 1938 参照。

のアフガニスタン南東部との関連を論じ [Marqurt & de Groot 1915: 288-89], それを承けたスカルチア G. Scarcia がより詳細な議論を行っている [Scarcia 1965]。そこでスカルチアはザッハークの伝説と、初期のムスリムの征服の際にダーワルの Jabal al-zūr 山中でその神像が破壊されたというズール神の信仰とを結びつけて考えようと試みているが、彼の仮説の適否を判断するにはあまりに情報が不足している。

ジュースジャーニーは続いて、ザッハークがアフリーズーン Afrīdhūn に倒された後、ザッハークの子孫の一人ビスターム Bistām がアフリーズーンの軍におわれてゴールの地にいたり、ザール・イ・ムルグ Zār-i Murgh なる山の裾野に定住したという説と、アフリーズーンの兄弟スール Sūr とサーム Sām の娘と息子が駆け落ちして、ゴールのマンディーシュ Mandīš の地に落ち延び、そこに居を定めたという説の二つを紹介している [TN: 321-23]。基本的にこれらは神話の伝説的な物語であり、なんらかの歴史的な事件と対応させるのは困難であるのだが、ここで注目すべきは二番目の伝説にあらわれるマンディーシュという地名である。これは後にシャンサバーニー家がフィールズクーフに本拠を移すまで、王家の本拠地であり続けた場所なのである。

2 スルタン・マフムードの遠征

その後 Fūlād Ghūrī Šansabī, Banjī Naharān, Amīr Sūrī を経て、シャンサバーニー家はムハンマド・ブン・スリー Muḥammad b. Sūrī の時代となる。この時期、ゴール地方の外ではガズナ朝の勃興期にあたり、同朝初代セビュクテギン Sebüktegin がブスト方面から何度かゴールに遠征を行った。ガズナ朝の王位が第 3 代マフムード Maḥmūd に移るとゴールへの遠征が本格化し、それにつれてゴールの歴史も徐々に明らかになってくる。

前述の年代記 *Tārīkh-i Bayhaqī* に記録されるマフムード時代のゴール遠征は三回ある。一つは 1010 年、マフムードがブストからザミン・ダーワルを経てゴールに向かったもの [TB: 132]。二つ目は 1014 年、同じくブストからゴール南東部の Khwābīn へと遠征したもの [TB: 137]。三つ目は王子時代のマスウードが 1020 年にヘラートからハリールドを遡って行った遠征である [TB: 137-146]。一方、ウトゥビー Abū Naṣr Muḥammad al-'Utbi の *Kitāb al-Yamīnī* や *Ṭabaqāt-i Nāṣiri* に記録されるマフムードのゴール遠征というものがある。残念ながらこの遠征がいつのことだったのか両書には記述がないのだが、ウトゥビーによればこの遠征にはヘラートのワーリー、アミール・アルトゥンタシュ Āltüntāš (後のホラズムシャー)、トゥース Ṭūs のアミール、アルスラン・ジャーズィブ Arslan Jādhīb という、当時のマフムード麾下の最も有力な将軍が 2 人参加していた [KY: ii-123]。アルトゥンタシュは 1017 年以降ホラズムに任じられているので、この遠征はそれ以前に行われたことになる。これがバイハキーの記録するゴール遠征にあたるとするなら、1010 年のことだと考えられるだろう。後述するように 1014 年の Khwābīn 遠征は、ウトゥビー、ジュースジャーニーの記録する遠征とは目的地が異なるからである。

この時ムハンマド・スーリーはアーハンガラーン *Āhangarān* という城に立てこもって応戦したが、結局降伏し、息子シーシュ *Šiš* とともにガズナに連行される³⁾。ムハンマドの後には息子のアブー・アリー *Abū 'Alī* がガズナ朝によりこの地域の支配者の地位につけられた [TN: 329–330; cf. *Nāẓm* 1971: 71]。

3 アーハンガラーンとマンディーシュ

この遠征の様子から当時シャンサバーニー家がどこに領地を持っていたのか、言い換えればシャンサバーニー家の勃興のスタート地点がどのあたりだったのかをある程度知ることができる。マリクによれば、ムハンマド・ブン・スーリーが立てこもったアーハンガラーンは現在チャグチェラーン *Chagcherān* の南西、ハリールードからやや南に離れたところにあるカルア・イ・アーハンガラーン *Qal'a-yi Āhangarān* にあたるという [Maricq et Wiet 1959: 61]。一方ジュズジャーニーはムハンマドの居地はシャンサバーニー家の故地でもあるマンディーシュだと記しており [TN: 324, 328]、これをつきあわせるとマンディーシュは現在のアーハンガラーンを中心とする地域であったことになる。当然水系からするとハリールード沿い、第一エリアに属する。このことからマリクはシャンサバーニー家の根拠地はもともとハリールード沿いにあったのだと結論づけている。

確かにアーハンガラーンとマンディーシュを結びつけるのは状況証拠、すなわちムハンマド・ブン・スーリーが立てこもって応戦したことから考えても十分納得が行くことである。ジュズジャーニーによれば、アブー・アリーの子アッバース *'Abbās* はマンディーシュのサンガ *Sanga* という地に城を築き、その後このサンガがマンディーシュの中心になった [TN: 331]。そしてこれにあたりそうな *Sanga Bar* というむらが丁度アーハンガラーンとチャグチェラーンの間に今もある [Kohzad 1953: 59]。これもマンディーシュがハリールード沿いにあったという考えを補強しそうな点である。

しかし一方でマンディーシュの所在については別の可能性も指摘されている。バイハキーによれば、1030年ガズナ朝のマフムードが死去し、息子マスウードとムハンマド *Muḥammad* の兄弟の間で王位が争われて結局後者が敗れることになるのだが、この時ムハンマドはテギーナーバード *Teginābād* の地で配下によって拘束され、そこからマンディーシュの砦に移送される。テギーナーバードのクーフティーズ *Kūftiz* の砦から出発したムハンマド一行はまずジャンカラバード *Jankalābād* に到る。バイハキーは記す。

3) ウトゥビーはムハンマド・ブン・スーリーが立て籠もった砦の名を記していないが、603年/1206–07年に *Nāṣiḥ b Zafar Jurfādaqāni* によってつくられた *Kitāb al-Yamīni* のペルシア語訳である *Tarjama-yi Tārikh-i Yamīni* にはこの砦の名がアーハンガラーンであると記されている [TTY: 313]。 *Ṭabaqāt-i Nāṣiri* より以前に記されたこの書の記述の情報源がどこなのかは不明である。

ジャンカラーバードを發ち、ワーリシュターン Walištān の地に着くと、道の左側にマ
ンディーシュの砦が遠くに見えてきた。[TB: 84]

ここで言及されている地名に関しては、アブド・アルハッイ・ハビービー ‘Abd al-Ḥayy Ḥabībī が考証を行っている。彼によると、まずテギーナーバードは現在のカンダハールの旧市街にあたる。テギーナーバードはこの時期のみ現れる呼称であり、逆にカンダハールという名前が同時代の資料にみられないことからこの説は受け入れやすいものである。次のジャンカラーバードについてハビービーはカンダハールの北西 10 km, アルガンダープの左岸に現在もジャンカル Jankal という名前の村があるとしている [Ḥabībī 1971: 151]。しかしムカッダスィー [Muq.: 350] にはテギーナーバード (ムカッダスィーでは BKRABAD) から 2 マルハラ の距離にある KHNKLABAD=ヒンガラバード Khingalābād という地名が記録されていて、ジャンカラーバードはこれにあたるのではないかと考えられる⁴⁾。次の地名ワーリシュターンは、ハビービーによれば Wališt とも呼ばれる。通常 Wāliš/Bāliš/Walištān として知られる地名はカンダハールの南東、現在のバルーチスタンにある。しかしハビービーは、それを、カンダハールの北方にある現ティッリン・コト Tirrin Kot からさらに北西にすすんだあたりにあるゴールワーリシュト Ghūr-wālišt にあてる [Ḥabībī 1971: 150-151]。一方 *Ṭabaqāt-i Nāṣiri* には次のような記述がある。

四番目は Warnī である。ダーワルの地方、ワーリシュト、Qaṣr-i Kajūrān はその支脈、
周囲にある。[ṬN: 328]

これは、ゴールの山脈について述べた文章の一部であり、ここに見えるワーリシュトはダーワルの地方とともに現れることからゴール地方南東部、すなわち第二エリアに属するものと推定できる。

とすると、ゴールの南東部にあるワーリシュト / ワーリシュターンから遠望できるマンディーシュと、ハリールード沿いにあるアーハンガラーン周辺地域とではあまりに距離がか

4) ここで現れるテギーナーバード、ジャンカラーバード<ヒンガラバードについてだが、本文中にも記した如く前者はこの時期用いられたカンダハールの別名であろうと考えられている。この地域は9世紀まではテュルク系の支配者の領有する地域であった [稲葉 1991; 桑山 1993] が、両者の地名はその事実と関係するのではなからうか。7世紀末から8世紀初頭カーブルを中心とする地域にテュルク系の王家が成立し、次いでザープリスタンにも同じ王家の一員が王国を建てた。ところで桑山 1993: 410 によれば漢文資料は8世紀初頭、罽賓 (カーブル地域) に葛羅達支特勤 (Qaradachi Tegin) という王が冊立されたことを記録している。一方8世紀の中頃にはカーブルの王家に Khingāla という名を持つ王がいて745年にはウッディヤーナ Uḍḍiyāna 王を兼ねていたという [桑山 1991]。また、Ya‘qūbi [Historiae: 479] は、アッパース朝のカリフ、アルマフディーの時代 (775-785年) に KHNKHL という名のカーブルシャーがいたことを伝える。テギーナーバード、ヒンガラバードはそれぞれ「テギンのまち」「ヒンガルのまち」という意味の地名である。上述のテュルク系の王達とこの二つの地名を直接に結びつける材料こそないが、状況証拠は両群の間になんらかの関係があったことを示しているようにも見える。

け離れている。マンディーシュと呼ばれる地名が複数あったのか、あるいはアーハンガラーン=マンディーシュの比定に問題があるのかだが、筆者は後者の可能性を考える。というのも、マリクはこの説の根拠として1010年の遠征時マフムード軍はガズナから西に向かって直接山を越えてきたのではないかと示唆しているのだが、先に述べたようにバイハキーはこの時マフムードがブストから北へ向かい、ヘルマンドルード水系に沿って進撃したことを伝える [TB: 132]。またウトゥビーはガズナの軍がゴールの大軍と戦い、険しい峠を越えて最後にアーハンガラーンに到ったと記している [KY: ii-123] が、これはガズナ軍がヘルマンドルード水系から分水嶺を越えてハリールード水系に到ったことを示しており、ムハンマド・ブン・スーリーの軍はガズナ軍に追われて北へ撤退し、最後はアーハンガラーンに立てこもったのだと考えることができる。確証に欠けはするが、こう考えることにより上述のマンディーシュの問題は解決できるかもしれない。マンディーシュとサンガの関係についても、例えば候補としてヘルマンドルードの上流、ルード・イ・ゴール水系との分水嶺をなすクーフ・イ・サンガン Kūh-i Sangān という山の麓にあるサンガン Sangān というまちをあげることもできる。ここなら南のカンダハール方面からやってきたムハンマド一行が道の左手に遠望できる山がある。またアダメックによれば、ここから北のハリールード水系へとつながる道がタイマニの民によって近年も移牧のために利用されているらしい [Adamec 1975: 351]。もちろんサンガがここでなくてはならないという確証はないわけだから、とりあえずこの時期シャンサバーニー家の支配地域がヘルマンドルード上流域から山を越えてハリールード水系の一部にまで及んでいた可能性が高いという点のみ、ここで確認しておく。

4 マスウードの遠征と DRMYŠ BT

再びガズナ朝の遠征の話に戻ろう。1020年、マフムードの息子マスウードによってヘラート方面からゴール地方への遠征が行われた。マスウードは軍を率いてハリールード沿いに東へ向かい、チシュトを経てゴールの地に入る。この時、ゴールの有力な首領の一人であるアブー・アルハサン・ハラフ Abū al-Ḥasan-i Khalaf とゴール、グーズガーナンの境域にいた別の首領のシールワーン Širwān の二名がマスウードに協力している。マスウード軍とこの両名の軍が集結したのが、チシュトのやや東にあった Bāgh-i Wazīr というリバートだった。ここからマスウード軍はゴールの山中に入っていく、まず BRTR という砦を落とす。それから RZAN を経て、WY を攻め落とし、ついで TWR を陥落させ、多くの戦利品を得てヘラートに戻っている。この遠征の途中、RZAN を陥落させた時、その近隣に領地を持っていた DRMYŠ BT なる王がマスウードに服従してきている。この人物はジャルワス Jarwas のまちに根拠をおいていたという [TB: 137-145]。

マフムードによるアーハンガラーン攻略から約10年後のこの遠征時の記述から明らかになるのは、この頃未だゴールは諸勢力の割拠する地域であり、後のゴール朝のごとき統一政権は影も形もなかったということである。

アブー・アルハサン・ハラフやシールワーンについてはこれ以外に情報がなく不明なのだが、DRMYŠ BT の方は実は別の資料にも記述がある。10 世紀末、ゴールに隣接するグーズガーナーンでおそらくは書かれたであろう著者不明のペルシア語地理書 *Hudūd al-Ālam* には DRMŠAN という地名が言及され、その支配者として DRMŠY-šāh という名前があげられている。この DRMŠAN はブストとグーズガーンに接する地域だとされる [H'Ā: 96]。ミノルスキーはこのことから、この王の支配領域はムルガープとハリールドの間から南の方へと伸びていた、すなわちこの王はゴール地方の東部を南北に広がる地域を支配下に入れていたのではないかと推測している [Minorsky 1982: 333]⁵⁾。一方同書はこの DRMŠY-šāh とは別にまた Ghūr-šāh という支配者がゴールにいることも記している [H'Ā: 101]。この記述から、ミノルスキーとそれに従うマリクとは後者をシャンサバーニー家、前者を *Ṭabaqāt-i Nāṣiri* に見えるゴールのもう一つの有力家系であるシーシュ Šiš 家にあてようとする [Minorsky 1982: 333; Maricq et Wiet 1959: 63]⁶⁾。この同定が正しいかどうかはいまは措くとしても、1010 年以降ガズナ朝に服していたマンディューシュのシャンサバーニー家とこの DRMYŠ BT とが異なるものであるのは確実である。

この遠征の時にあらわれる地名については、ミノルスキー、マリク、ハビービー等が同定を試みているが、傍証の少なさゆえに確実な結論にはいたっていない。特に遠征経路の点に着目しつつ筆者の考えを述べるなら以下のようなになる。

マスウードはヘラートから東に向かってチシュトにいたる。ここまではマスウードに抵抗する者はいなかった。もしかしたらアブー・アルハサン・ハラフの領地がこのあたりだったのかもしれない。一方ハリールドの中流域にはアーハンガラーンがあり、ここはガズナ朝に服していたわけであるから、ハリールド沿いに遠征がなされのであれば DRMYŠ BT の領地はチシュトとアーハンガラーンの間にあったということになる。彼の本拠地は先に述べたようにジャルワスというまちだったのだが、このまちは Yāqūt の *Mu'jam al-Buldān* によれば「ヘラートとガズナの間に」あった [Yāqūt.: iii-130]。ヘラートからガズナ方面へ向かう道は最初に述べたようにハリールド沿いに伸びているから、ジャルワスがハリールド水系に属する地域にあったとすることの、これは傍証になるかもしれない。またバイハキーによれば、RZAN を攻め落としジャルワスまであと 10 日の距離になったとき、DRMYŠ BT が服従の意を示してきたために、マスウードは「向きを転じて」WY と TWR に向かったという [TB: 139]。バイハキーの記述から、ジャルワスはチシュト→バグ・

5) この名前の前半部をミノルスキーは Varmēš (マリクは Warmēš とする) と復元する。一方後半部 BT はペルシア語の bet/bed にあたるので、DRMYŠ BT/DRMŠY šāh はともに「Darmiš < Varmēš (の) 王/長」を意味すると考えられる。

6) *Ṭabaqāt-i Nāṣiri* [ṬN: 351] にはシーシュ家の DRMYŠ なる人物が登場しており、それがミノルスキーやマリクの推測の一つの根拠となっていると考えられる。

イ・ワズィール→BRTR→RZAN という行程の先にあったことがわかるが、マスウードが最初にとったルートは地形的に見てもハリールード沿いのものであったと考えるのが自然であるから、やはりジャルワスはチシュトとアーハンガラーンの間位置することになる。マリクはRZANをZarānに比定しており、それはハリールードの支流ザラーン川沿いのどこかだろうと述べている。図3にも示したが、現在アフガン山塊を東西に貫く幹道は、このザラーン川河口からシャフラク川沿いに東へ向かい、シャフラク Šahrak のまちを通る。ジャルワスが果たしてこのシャフラクのあたりにあったのかどうかやはり確証はないが、11世紀初頭DRMYŠ BTの領地はアーハンガラーン以西のハリールード水系に属していた、という点までは了解できると考える。

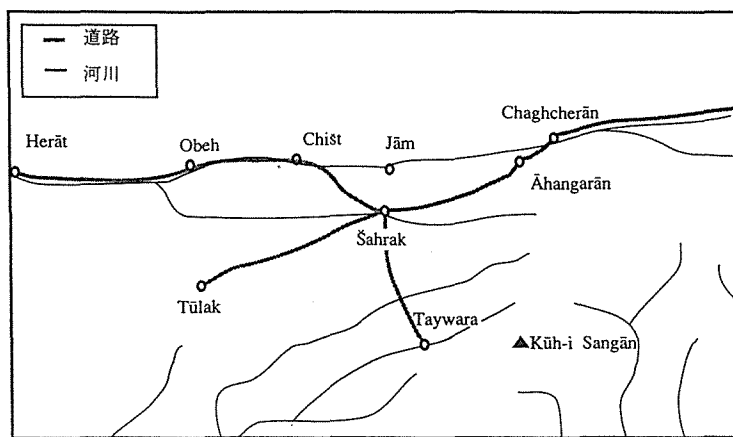


図3 ハリールードの流路と幹道（現代）

前述のようにマスウードはRZANからジャルワスに進まず「向きを転じて」WYとTWRに向かった。ジャルワスがハリールード水系にあったとすれば、WYとTWRはそれとは別の方向、地域にあったことになる。候補を探すとすれば現在のタイワラ Taywara を中心とする地域になるだろう。バイハキーはWYについて

そこはかつてゴールの国都 (dār al-mulk) でもあった。その地を領有したワーリーには、[ゴール] 全土が服従したのであった。[TB: 140]

と述べているが、ここで想起されるのはジャームのミナレットが「発見」される前に、タイワラがホルディッヒ Holdich によって、その気候の良さ、豊かさ、遺跡の豊富さゆえにフィールズクーフの候補だと考えられていたことである [Holdich 1910]。実際、近現代においてもこのタイワラが、タイマニ族が多数を占めるゴーラト Ghorat 地方の中心であったことは梅棹氏によって記録されている。同時に梅棹氏はタイワラからヤハーン Yahān に到るルード・イ・ゴール沿いに数多くの物見塔らしき遺跡が立ち並んでいて、その様相や密度からいっても中心はヤハーンあたりだろうかともし記している [梅棹 1956: 82-83: cf. Ball

1982: i-186, 264]。ちなみにバイハキーはマスウードが WY を攻めた時、そこに「ゴール風のクーシュク (kūšk) が多数あったと記録している [TB: 141]。ここで言う「クーシュク」は小規模の砦を意味しているが [Raverty 1979: i-331 n.2], これは梅棹氏の報告と

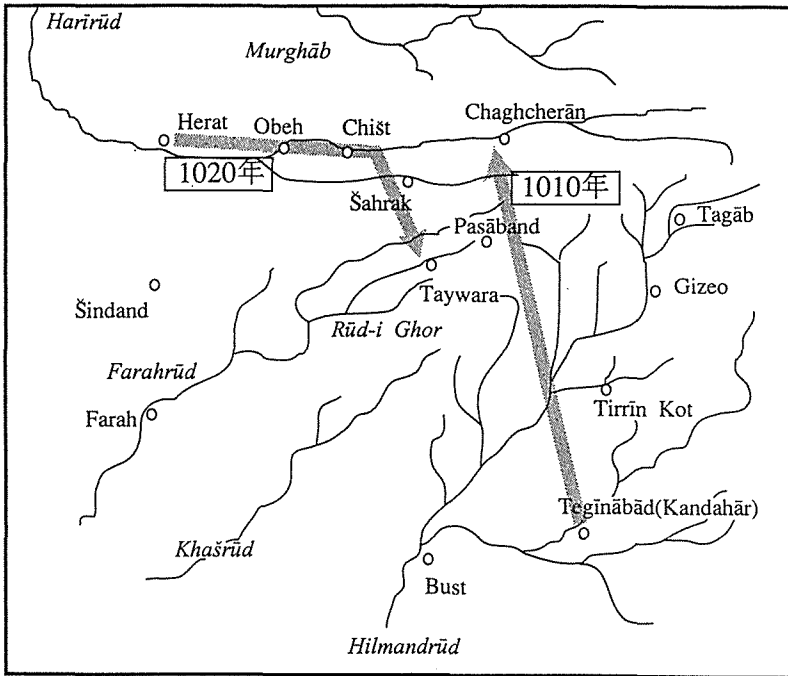


図4 11世紀前半におけるガズナ朝の遠征経路

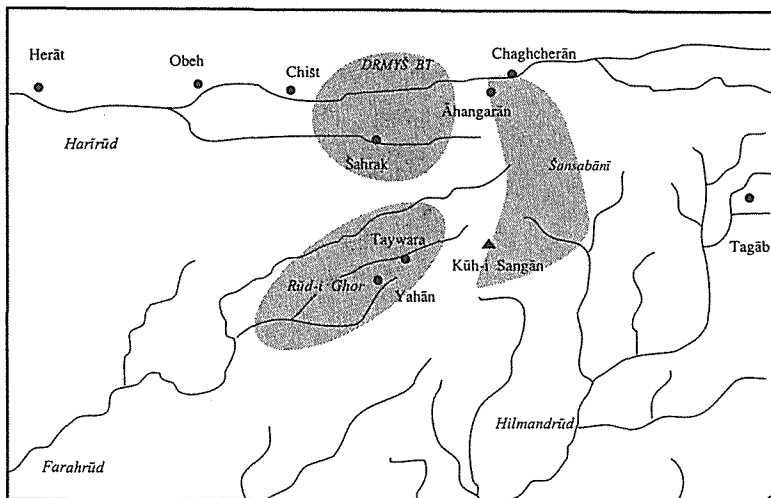


図5 11世紀前半のゴールの勢力図

符合するものと言える。この地域が冒頭で提示した第三エリアの中心であったことは確実であろう。もしかしたらこの地域の主こそが *Hudūd al-‘Ālam* に見える Ghūrshāh なのかも知れない。

以上、11世紀前半におけるガズナ朝のゴール遠征の記述を手がかりに、その遠征経路の検討とゴールの情勢についての推論を行ってきた。11世紀前半ゴールの地には知られている限りで三つの勢力が三つの水系の応じる形で存在していたのではないかと、というのが本章での検討から導き出した筆者の結論である。なおガズナ朝の遠征経路については図4に、ゴールの政治勢力のあり方についての概念図は図5に示しておいた。

Ⅲ アフガン山塊を巡る道とゴール朝

1 シャンサバーニー家の興隆

その後のシャンサバーニー家の歴史は、既にキーファー Kieffer Ch. [1961; 1962], ボズワース [1977] らによって詳しく描写されている。ここではジューズジャーニーの記述に主に拠りながらその概略のみを簡単に辿っておきたい。

マスウードの時代、アブー・アリー兄弟シーシュの息子であるアッバース ‘Abbās が叔父に反乱し、シャンサバーニー家の統領の座を奪った。その後ガズナの王位がイブラーヒーム Ibrāhīm (在位 1059-99年) に定まると、彼は他のゴールの民の要請を受けて出兵し、アッバースを廃してその息子ムハンマド Muḥammad を擁立した [ṬN: 330-33]。ちなみに13世紀の著述家であるシャバーンカーライー Muḥammad b. ‘Alī Šabānqāra’ī によれば、ゴールがガズナ朝に背いたのは、篡奪者トゥグリル Ṭughril によってアブド・アッラシード ‘Abd al-Rašid (在位 1049-52年) が殺された1052年のことだという [MA: 85]。

イブラーヒームにより擁立されたムハンマドも、その後を継いだ兄弟のクトゥブ・アッディーン・ハサン Quṭb al-Dīn Ḥasan も、おそらくはガズナ朝と良好な関係を保ち、それを背景として着実に力を伸ばしていったと考えらる。クトゥブ・アッディーンの子イZZ・アッディーン・フサイン ‘Izz al-Dīn Ḥusayn の時代になると、シャンサバーニー家はガズナ朝との関係と平行してセルジューク朝のスルタン・サンジャル Sanjar との関係を深めていく。毎年贈り物をし、その返礼を受け取るようになっていったとジューズジャーニーは伝えている [ṬN: 335]。

イZZ・アッディーンは死去する前に自分の息子達に領地を分配した。クトゥブ・アッディーン・ムハンマド Quṭb al-Dīn Muḥammad には Warsār/Waršāda を、サイフ・アッディーン・スーリー Sayf al-Dīn Sūrī には Istiya を、ナースィル・アッディーン・マフムード Nāṣir al-Dīn Maḥmūd⁷⁾ には Mādīn を、バハー・アッディーン・サーム Bahā’ al-Dīn

7) *Ṭabaqāt-i Nāṣiri* はここで Nāṣir al-Dīn Maḥmūd と記しているが、同じ人物は別の箇所 [ṬN: ↗

Sām にはマンディーシュの都サンガを、アラー・アッディーン・フサイン 'Alā' al-Dīn Husayn には Wajir の砦を、ファフル・アッディーン・マスウード Fakhr al-Dīn Mas'ūd には Kāšī の地を与えた [TN: 335-36]。これらのうち Wajir はヘルマンドルード水系の最も東の部分に占めるワジリスターン Wajiristān に、Kāšī は現チャグチェラーン郊外の Qal'a-yi Kassi にあたる [Dupree 1970: 458]。

クトゥブ・アッディーンはその後自らの居地にふさわしい場所をと求めてフィールズクーフの地を選びまちの造営を始める。しかし兄弟達と不仲になりフィールズクーフの造営を放り出してガズナに去った。そのときガズナ朝のスルタンはバフラームシャー Bahrāmshāh であった。彼の即位は1117年(1157年まで在位)なのでフィールズクーフの造営はその頃あるいはそれ以降の時期に着手されたと考えてよい。

ガズナに迎えられたクトゥブ・アッディーンはバフラームシャーへの叛意を疑われ毒殺されてしまう。これがその後のガズナ朝とシャンサバーニー家の戦いのきっかけとなった。クトゥブ・アッディーンは復讐のため、兄弟のサイフ・アッディーン・スーリーがゴールの軍を率いて進撃し、1149年バフラームシャーからガズナを奪いとる。しかしサイフ・アッディーンは冬期ゴールの本地と切り放されて孤立したところをバフラームシャーに反撃され、捕らえられて殺される。今度はサイフ・アッディーンは兄弟、バハー・アッディーンとアラー・アッディーンは2人がガズナ遠征軍を組織しガズナを目指した。バハー・アッディーンは遠征途上客死してしまうが、アラー・アッディーンは再び大軍を組織しザミンダーワルからガズナ方面へ向かった [TN: 336-39]。

アラー・アッディーンは迎撃のために出陣してきたバフラームシャーのガズナ軍とザミンダーワルで激突し勝利を収める。その後テギーナーバードにガズナ軍を追撃し、再びこれを打ち破ってそのままガズナに進撃してまちを制圧した。ちなみにこの時ガズナのまちに火をかけ、七日七晩燃やし続けたところから彼は「ジャハーンスーズ Jahānsūz (世界を燃やす者)」の異名をとることになる [TN: 341-46]。次いでアラー・アッディーンはスルタン・サンジャルとの間に戦端を開き、遠征してきたセルジューク軍とナーブ Nāb の地(チシュトとオーベの間)で戦うが敗れる [TN: 346-47; IA: xi-164; ChM: 65-66]⁸⁾。彼はしばらくサンジャルのもとに捕虜としてとめおかれた後ゴールに戻り、今度はバーミヤーン、トハーリスターン Ṭukhāristān を征服、南方ではジュルム Jurūm, ダーワル, ブストを制する。同時にゴール西部のトゥーラク Tūlak の砦やガルチスターンの諸地方をも征服し、アフガン山塊のほとんど全てをその手中として名実ともにゴールの王となる [TN: 348]。

↘ 339) では Šihāb al-Dīn Muḥammad として言及されている。図2には後者の呼び名を採用した。
なお Raverty 1970: i-343 n.5 参照。

8) *Chahār mǧāla* では、戦いの場は awba (現オーベ) とされている。

アラール・アッディーンの後を継いだ息子サイフ・アッディーン・ムハンマドの時代、アラール・アッディーンによってワジールスターンの城に幽閉されていたバハール・アッディーンの2人の息子、ギヤース・アッディーン Ghiyāth al-Dīn Muḥammad とムイッズ・アッディーン Mu'izz al-Dīn Muḥammad が解放される。サイフ・アッディーンの死後ギヤース・アッディーンが後を継いでゴールの支配者となり、弟ムイッズ・アッディーンとともに、ホラーサーン、アフガニスタン、北インドにいたる広大な領域を支配しゴール朝の最盛期を現出することになるのである。

2 シャンサバーニー家とガズナ朝

このようにしてシャンサバーニー家はゴールの支配者となり、我々がゴール朝と呼ぶところの王朝を樹立したわけだが、前章で述べたようにガズナ朝がゴールに侵攻し始めた時期、同地は多くの小規模な首長達が割拠する状況にあったと考えられる。1020年の時点でも少なくとも三つ以上の勢力が確認でき、シャンサバーニー家もその一つに過ぎなかった。その中からシャンサバーニー家はどのようにしてゴールの支配者になることができたのだろうか。もちろん資料の絶対的不足という状況下、詳しい事情は不明なのだが、ボズワースも簡単に示唆している通り [Bosworth 1977: 68-69]、そこにガズナ朝の干渉があったことは否めないだろう。1010年にマフムードがムハンマド・ブン・スーリーをアーハンガラーンに打ち破った後、マンディーシュの支配者となったムハンマドの息子アブー・アリーはマフムードの遠征の前からガズナ朝と連絡をとり、親ガズナ朝の姿勢を見せていたとジュズジャーニーが報告している [TN: 330]。当然彼は父のあとを継いだ後もガズナ朝の後ろ盾を得ながら支配を行ったと考えられる。ところがガズナ朝側の混乱、すなわち1030年代後半以降のセルジューク朝に対する敗北や、1052年の将軍トゥグリルによるガズナの王位篡奪といった事件に呼応するように、シャンサバーニー家の領域における親ガズナ朝派は力を失い、反ガズナ朝の立場をとるアッバースが政権を握る。やがてガズナ朝側がイブラーヒームの時代になり、それと前後してセルジューク朝とガズナ朝の間に和平が成立すると⁹⁾、再びガズナ朝はゴールに介入する。イブラーヒームは軍事遠征を敢行してアッバースを廃し、その息子ムハンマドを王位につけたのである。王位についたムハンマドはガズナのスルタン達によく仕え、定められた税金をガズナに送ったという。明らかにガズナ朝側の政情とシャンサバーニー家の動向は連関している。

ムハンマドの後を継いだクトゥブ・アッディーン・ハサンはタガーブ Tagāb 等ゴール南東部の地域に積極的に進出し、その成果を受け継いだイッズ・アッディーンはガズナ朝のみ

9) セルジューク朝の成立からサンジャルのガズナ征服にいたる約80年間のセルジューク朝＝ガズナ朝の関係については稲葉 1990を参照。

ならず、当時ホラーサーンの支配者として、また大セルジューク朝の復興者として勢力を増大しつつあったサンジャルとの間に関係を結ぶことにより、自らのゴール内部での立場をより強固なものとしようとした。イブン・アルアスィール Ibn al-Athir の以下のような記述が状況をよく示している。

[クトゥブ・アッディーン・ムハンマド・ブン・フサインは] ガズナのサーヒブ、バフラームシャー・ブン・マスウード・ブン・イブラーヒームの縁戚であった。バフラームシャーはセビュクテギンの家系に連なる者であり、この縁組みの故にムハンマドの力は高まった。[IA: xi-135]

このように、外部の強力な勢力との関係を背景にシャンサバーニー家はゴール全域に対して徐々に支配権、というよりも指導権を確立していったと推測されるのである。

3 シャンサバーニー家とゴール諸侯

逆に、外部勢力の権威や力を借りねばならないほどゴールの内部はまとまりを欠いていたとも言える。考古学的に見たゴールの特徴というのは、山々の尾根沿いに点々と連なる小規模な砦や塔の存在なのだが [Allchin & Hammond 1978: 335-343]¹⁰⁾、これもゴール地方が小規模な政治勢力の群立する地域であったことの傍証となるだろう。後にガズナ朝やセルジューク朝の力を背景にゴールで最も有力な家系となったシャンサバーニー家も決して他の諸侯に対して絶対的な支配力を持っていたわけではなかった。例えばジュズジャーニーはクトゥブ・アッディーン・ハサンの治世の項で次のように記している。

ゴールの諸部族全体の気質の中に暴虐、粗暴、驕慢、叛意、反抗が強く存していた。常に二つの部族の間に反目と戦いがあったし、毎年ゴールの王国のどこかで反乱が起こっていた。[反乱者達は] 定められた税の支払いを拒否した。いま現在、スルタン達の治世の終わりになってもそれらの諸部族の状況は同じ様なものである。[TN: 333]

その後、ガズナを征服して勢いに乗っていたアラー・アッディーンがサンジャルに敗れ捕らえられていた間、ゴール諸侯はあつというまにシャンサバーニー家に対して叛旗を翻し、アラー・アッディーンの子ナスィル・アッディーン・フサイン Nāṣir al-Dīn Ḥusayn を自分たちの傀儡としてゴールの王位につけた。ジュズジャーニーは記す。

スルタン・アラー・アッディーンがゴールの玉座にいない隙に、ゴール地方の山地のアミール達、有力者達の合意でアラー・アッディーンの子マリク・ナスィル・アッディーン・フサイン・マーディーニーが連れてこられ、フィールズクーフで即位させられた。他のゴールの人々よりも高慢とか専横を好んだ反抗的な領主 (wilāyat kiṣi)

10) ゴール南西部のそれについては第三章でも言及した梅棹 1956: 82-83 を参照。また、バーミヤーンにおいてもゴール朝時代前後に建設されたとおぼしき、険しい山の尾根に点在する小砦が見られる [Le Berre 1987]。

の一団は多くの悪事を働き、スルタンの財庫や財産をマリク・ナーシル・アッディーンから報酬、サダカ、下賜と称して無理やり手にいれた。[TN: 348]

またジュズジャーニーはゴールにシャンサバーニー家と並ぶ勢力の持ち主としてシーシュ家という家系があったと伝えている。ゴール朝の最盛期のスルタンであったギヤース・アッディーンは前述のように従兄弟であるサイフ・アッディーンの死後、その後を継いでスルタンとなるのだが、サイフ・アッディーンを死にいたらしめたのは彼が戦っていた敵であるグズではなく、シーシュ家のアブー・アルアッパース Abū al-'Abbās なる将軍だった。アブー・アルアッパースは自分の兄弟がサイフ・アッディーンによって殺されたことを恨み仇討ちをしたのである。アブー・アルアッパースはギヤース・アッディーンを王位につけ、自らその後見者となって大きな権力を握ったが、後にギヤース・アッディーンによって除かれる [TN: 354-55]。

この出来事はシャンサバーニー家の支配が決して安泰ではなかったことをもちろん示しているのだが、もう一つの背景として、シャンサバーニー家内部の王位継承争いを指摘することができるかも知れない。ジュズジャーニーによればイZZ・アッディーンの七人の息子のうち、王家の拠点サンガを分封されたのはバハー・アッディーンであり、彼こそがシャンサバーニー家の当主の座を父から受け継いだ人物だった。しかしバハー・アッディーンはガズナへの遠征途上死去し、彼の弟であったアラー・アッディーンがガズナ征服の功をもってシャンサバーニー家の当主となった。アラー・アッディーンの後を継いだのは息子サイフ・アッディーン。一方バハー・アッディーン嫡流であるギヤース・アッディーンとムイZZ・アッディーンの兄弟はアラー・アッディーンにより幽閉されていたのである。ギヤース・アッディーンの即位はシャンサバーニー家の当主の座がアラー・アッディーン系統から再びバハー・アッディーン系統へと戻ったことを意味する (図2参照)。アブー・アルアッパースによるサイフ・アッディーン殺害にギヤース・アッディーンが積極的に関わった証拠はもちろどこにもないのだが、意図したにせよしなかったにせよギヤース・アッディーンは、シャンサバーニー家のゴール支配が磐石という言葉からほど遠い、という状況のお陰で王位につくことができたのである。

もっと後になって、ギヤース・アッディーンとムイZZ・アッディーン兄弟が大成功をおさめた後ですら、実はスルタン達はその軍を完全には掌握していなかったのではないかと疑わせるような記事もイブン・アルアスィールに見られる。1187年にアジュメール方面へ遠征したムイZZ・アッディーンはチャーハマーナ朝の王プリティヴィラージャ Prithivirāja を中心とするインド軍に手痛い敗北を喫し、ムイZZ・アッディーン自身も重傷を負った。ムイZZはこの敗北の原因を、態勢悪しと見てムイZZ・アッディーンを見捨てさっさと敗走してしまったゴール軍にあるとし、自分はもうゴールの軍隊を信用しないと声明している [IA: xii-91]。ラホルのガズナ朝を滅ぼして北インドの覇者となりつつあったムイZZ・アッディーンでさえ、ゴール人の軍隊の掌握には手を焼いていたという証であ

ろう。

このようにいつ離反するかわからないような諸勢力を糾合しまとめあげるには、外側に共通の敵、目標を設定し、利害を共有するのが一番の方法である。ジュズジャーニーはシャンサバーニー家の王の系譜に、はじめてガズナを征服したサイフ・アッディーン・スーリーの名をあげているが、彼にしてもアラール・アッディーンにしても、強大な外敵ガズナ朝に挑み戦うという目標において、ゴールの軍勢を統率することができたのであり、それによってゴールの王として列せられていると言える。クトゥブ・アッディーンの殺害に端を発するシャンサバーニー家の一連の対ガズナ朝戦争は、それが勝利を重ね多くの戦利品を提供し得たことによって、同家の求心力を一層高めたと考えられる。アラール・アッディーンはその力をうまく統合して爆発的な拡大へと結びつけた。ゴールから外へ向かって進出することによってはじめてシャンサバーニー家はゴールの統率者、支配者となることができたのである。

IV フィールズクーフの所在

1 フィールズクーフを巡る問題

最後にゴール朝に関しておそらく最も良く知られている問題について言及しておきたい。ゴール朝の都であるフィールズクーフの所在である。この議論が生じたのは、1957年フランスのアフガニスタン考古学調査隊の一員であったアンドレ・マリクが、アフガニスタンの著名な歴史学者アフマド・アリー・コーフザード Ahmad 'Ali Kohzad の依頼を受け、土地の人のみに知られていたミナレットの調査を行ったことがきっかけだった。このミナレットはハリールド沿い、シャフラクのまちから北北東へ向けて約 40 km のところ、ハリールドに支流のジャーム河がそそぎ込む狭隘な谷間の南東の岸に位置している。マリクは1959年にミナレットの調査報告を刊行し、そこでミナレットのある場所すなわちジャーム Jām こそがゴール朝の都フィールズクーフだったに違いないと述べた。マリクにそう確信させるほどに、このミナレットは見事な建築物であった。それに対してローレンツ・レシュニク R. Leshnik はマリクの地名比定に異議を唱え、フィールズクーフの候補としては、ジャームのミナレット「発見」以前に、ホルディッヒによって比定されていたタイワラの地の方がやはりふさわしいのではないかとした [Leshnik 1968-69]。その後ジャーム説を支持する研究、ジャーム説に疑問を呈する研究などが発表されたが、ここで一体何が問題なのかをまとめてみたい。

最初にジャーム説に疑問を呈したレシュニクの論点は大きく三つあった。一つはジャームが周囲から極めて孤立したロケーションにあるという点である。だからこそその見事な建築美にもかかわらず今世紀の半ばまで限られた者しかこの存在を知ることがなかったのである。現代、中央アフガニスタンを東西に横断する道は、ヘラートを発して最初ハリールド沿いに東に進み、チシュトの東方で南東にそって、ハリールドの支流の一つであるシャフ

ラク川の流域に入る。それからシャフラクのまちを通過し、今度は北東に向かって、アーハンガラーンのやや東でまたハリールードの流域に入る（図3参照）。ジャームのミナレットは上述のようにハリールード沿いにあるのだが、このチシュト～アーハンガラーン間、ハリールードの峡谷は非常に険しく、川沿いには十分な広さを持つ道がない。またシャフラクからジャームにいたる道も、険しい峠を最低三つは越えなければならないと報告されている [Dupree 1970: 465]。そのような孤立した場所が、仮にもホラーサーン、北インドにまたがる帝国を現出したゴール朝の都であったとは信じられない。またミナレットのある地点は両側から険しい山が迫っていて、ジュズジャーニーが報告するような宮殿やモスクが存在したり、バザールや住居が並ぶような空間的余裕がないともレシュニクは指摘する [Leshnik 1968-69: 41-42]。

二番目はマリクによって行われた幾つかの地名比定に対する疑義で、その中でも重要なのは、フィールズクーフと、ゴール朝の冬の都があったザミン・ダーワルの地は40ファルサングの距離にあったとするジュズジャーニーの記述 [TN: 364] の解釈である。ジャームとザミン・ダーワル＝ブストの間は実際にはもっと離れているというのである [Leshnik 1968-69: 45-46]。

三番目は現在ハリールードの北方に暮らすフィールズクーヒー Firūzkūhī と呼ばれる部族の存在で、マリクはこの部族の名前自体がフィールズクーフからとられたものであり、彼らがハリールードの北方にいるという事実は、フィールズクーフのまちがハリールードのすぐ近く（マリクによれば南側）にあったことの証だと述べるのだが、レシュニクは彼らが現在も半遊牧生活を送っている、すなわち移動する民であることや、フィールズクーヒーを含むチャハール・アイマクの民の起源は実はかなり新しいのではないかといった点を指摘し、ティムール朝時代以降フィールズクーヒーが同じ場所に住み続けていたというマリク的前提を否定している [Leshnik 1968-69: 42-43]。

レシュニクによって提出されたこれらの疑義に対し、ジャーム説を擁護する研究がいくつか発表され、その中で第二点、第三点についてはヤナータ A. Janata [1971] やヴェルセルリン V. Vercellin [1976] によって説明が試みられている¹¹⁾。それでも1970年代にジャームを詳しく調査したドイツのヘルベルク W. Herberg [1976] は、どう考えてもあのような狭隘な谷間に大きな都があったとは考えにくく、またジャームにはジュズジャーニーの記す都のファシリティーに適合しそうな遺跡は残っていないと指摘している¹²⁾。

11) レシュニクの第二点については、スカルチアが別の説を提出している。すなわち、ゴール地方の南部にあるラルワンド Larwand で発見されたインド風の意匠を持つモスクについての調査報告の中で、この場所こそがフィールズクーフから40ファルサングの距離にあるゴール朝の冬の都なのではないか、と述べたのである [Scarcia & Taddei 1973]。ただ、スカルチアもフィールズクーフの場所についてはジャームであると考えている。

12) 一方1962年にイタリアのブルーノは、ジャームのミナレットの近くでヘブライ語の銘の刻まれ

結局問題は、周囲から隔絶したジャームのロケーションの評価、つまりレシュニクの第一の疑義の部分に絞られるのではないかと筆者は考える。マリクは、ゴール朝時代アフガン山塊を横断する道はずっとハリールード沿いにあり、ジャームはその途上、しかも位置的にまさしくアフガン山塊のまん中に位置することにより、各方面に対してのアクセスがよかったのではないかと考えており [Maricq et Wiet 1959:60]、逆にレシュニクは、ゴールのように険しい山と深い峡谷を地理的特徴とする地域において、昔と現在とで全く幹道が異なることなど考えられないとするのである [Leshnik 1968-69:41]。ちなみにヘルベルクは、ジャームからハリールード沿いに東西に進むのは極めて困難だし、西側に向かっては道すらないのだと報告している [Herberg 1976:67]。

この問題に関して、現地調査が不可能な現在の状況で何か決定的な説を出すことはもちろん不可能であるが、11-12 世紀のアフガニスタンの政治的地理的状況という、もう少し大きな枠組みから何らかの考察が可能ではないかと考える。

2 道の交わる場所

ここで注目するのはゴール朝の外への発展という動きの中でフィールズクーフがどんな意味を持っていたのかである。

先に述べたように筆者はサイフ・アッディーン・スーリーとアラール・アッディーン・フサインの成功によってはじめて、ゴールの諸勢力を糾合する政治勢力としてのゴール朝が成立したと考えるのだが、特にアラール・アッディーン¹の征服活動が有した意味は大きかった。イブン・アルアスィールによれば、彼はガズナ征服直後の 1152 年はヘラート方面へ軍を差し向け、ヘラートから 4 マルハラの距離にあるマラーバード Malābād を荒らしヘラートを包囲している。また北方バルフに迫って一旦はまちを征服したという [IA: xi-164]。その結果としてセルジューク朝のサンジャルとアラール・アッディーン¹の軍がハリールード沿いのナーブの地で激突することになる。この戦いではゴール軍が敗れ、アラール・アッディーン¹は一時虜になっている。一方ジューズジャーニーによると、アラール・アッディーン¹はサンジャルの捕虜の身から解放されゴールに戻った後、バーミヤーンからヒンドゥークシュの北方に進出したと言う [TN: 348]。順番はどうあれ、彼は結果としてアフガン山塊を巡る道の東半分を手に入れた。当時この道の上で他世界とのジャンクションとして機能していたまちは、北からバルフ、ヘラート、スィースターン、カンダハール、ガズナの五つで、それぞれがマーワラー・アンナフル、ホラーサーン、ケルマーン/ファールス、スィンド、ガンダー

1 多くの石を発見し、それを、そこにあったであろうユダヤ教徒の墓地に由来するものではないかと報告した [Bruno 1963]。ブルーノはジャーム＝フィールズクーフ説に立脚し、フィールズクーフの軍営相手に商売をしていたユダヤ人の小規模なコロニーがそこにあったことの証ではないかと推測している。

ラ / パンジャーブという地域へと到る道の出発点になっていた。かつてガズナ朝はこの道を支配することにより多大な富を得、それをもってインド征服の軍資とした [稲葉 1994 : 210-11]。アラール・アッディーンの真の意図を今知るすべはないが、中央アジア、西アジア、南アジアを結ぶ結節点としてアフガン山塊を巡る道が産み出す富が、征服活動の大きな狙いの一つであったことは想像に難くない。結果として彼の征服活動はアフガン山塊を巡る道上の主要都市に対する多発的攻撃であったのである。ヘラートとバルフについては、サンジャルや、そのサンジャルをさえ脅かしたグズの存在ゆえに支配下に置くことはできなかったが、その後ギヤース・アッディーンの時代にはこの両都市も征服された。

王朝の初期における軍事行動がこのような性格を持っていたなら、それは王都であるフィールズクーフの存在のあり方にも反映されるのではないか。アラール・アッディーンの後を継いだサイフ・アッディーンはグズを排撃するためにガルチスターン北部からメルヴ・アッロード Marv al-Rūd に進出している [T̄N : 354]。ギヤース・アッディーンの時、ヘラート、スィースターン、ガズナ、ターラカーン Ṭālaqān、フェールヤーブ Fāryāb 等が征服され、アフガン山塊を巡る道のほぼ全てがゴール朝の支配下に入った。またムイッズ・アッディーンによってガズナ、カーブル以東の北西インドへの進出もなされていく。このような征服活動において彼らの軍事行動の出発点は常にフィールズクーフだった。アフガン山塊を巡る諸地域に軍を率いて遠征し、征服し、支配するために便のよい場所にフィールズクーフはあったのではなかろうかとのマリクの推測に筆者も大卒として同意する。

逆の事例がある。ギヤース・アッディーンがフィールズクーフで即位した時、バーミヤーンの王であった叔父のファフル・アッディーンがフィールズクーフの王位を狙い、サンジャルの臣下であったバルフのアミール・クマジュ Amīr Qumāj, 同じくヘラートのアイテギン Aytegin¹³⁾ と同盟して三方からフィールズクーフに迫った。この時クマジュはガルチスターン道から、アイテギンはハリールード沿いの道から、ファフル・アッディーンはバーミヤーンから軍を進めた [T̄N : 355]。フィールズクーフはこの三つのルートの交わる場所にあった可能性が高い。

第二章で述べたように、ゴール朝出現以前に記されたアラビア語地理書群は周辺の地域からゴールにいたる道について、ブスト、ザミーン・ダーワルからヒルマンド沿いに北上する道とヘラートからハリールード沿いに東行する道の二本に言及している。ガズナ朝の遠征も常にこの二本の道から行われているし、逆にゴール朝が外へ進出していく場合にもこの二本の道が利用されることが多かった。このことから考えると、ゴール朝時代、ゴール地方とアフガン山塊周縁部を結ぶ幹道はこの二本と、北方のガルチスターン道、北東のバーミヤーン

13) ジューズジャーニーはこのヘラートの支配者を Tāj al-Dīn Yuldiz と呼んでいる [T̄N : 355-56]。

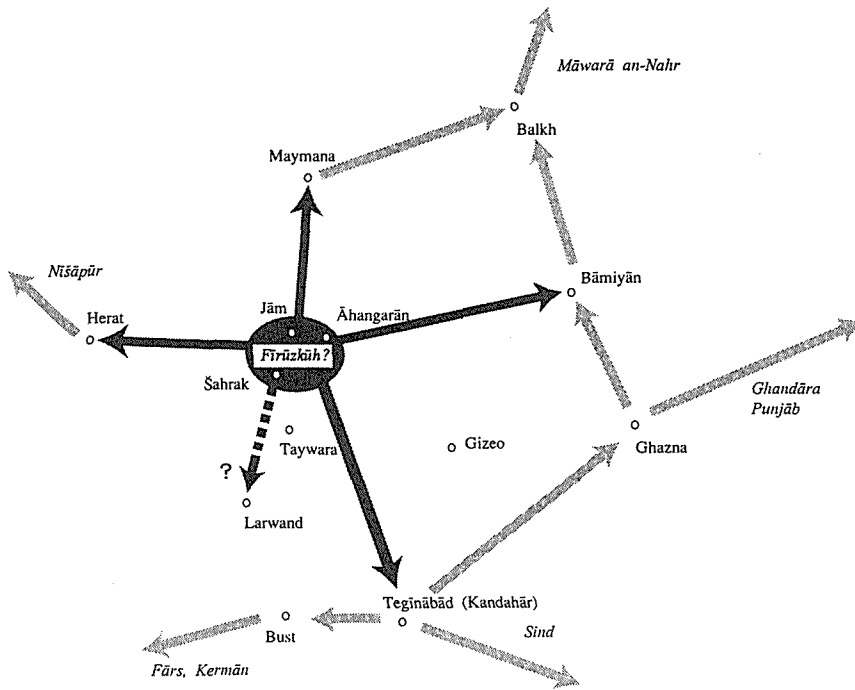


図6 フィールズクーフと他の都市

道の四本であったと言える。上述のようにフィールズクーフがアフガン山塊周縁部を支配する拠点だったとすると、この四本の道が交わるところにあれば申し分ないことになる（図6参照）。

最初に分類した三つのエリアのうち、この条件を満たしそうなのは、ハリールード沿いの第一エリアとヘルマンドルード上流の第三エリアである。そして興味深いことに先に想定した王朝創立以前のシャンサバーニー家の領地はこの二つのエリアに跨って存在している。フィールズクーフにまちの礎を築いたクトゥブ・アッディーンの時代、シャンサバーニー家の領域自体はまだゴールを覆うようなものではなかった筈であるから、フィールズクーフをこの二つのエリアに跨る地域の中に求めるのはそう無理な想定ではなかろう。

ではこのエリアの中の具体的にどこなのか、ということになると、現在筆者の持つ材料からは確定できない。候補としては確かにジャームの近辺が有力かも知れない。何もないところにあれだけのミナレットを建設するというのはどうも想像しにくい。しかしジャームそのものについてはその孤立したロケーションがやはり気になる。「大軍は大道を通る」という経験則がここでも通用するのなら、ジャームという場所は王都にはふさわしくないようにも思える。ロケーションの点から言えばジャーム南方のシャフラクのあたりの方が幹道にも乗っているし、ササン朝時代に遡るのではないかとされる土器片を出す遺跡もいくつかあり

[Kästner 1968-69; Fisher 1969:343; Ball 1982:i-241-42], よりふさわしいかもしれない。ただしシャフラクについては先にその近辺に根拠を置いていた筈の DRMYŠ BT のその後の動向が不明なのでなんとも判断がつかない。新たな考古学的発見でもない限りこれ以上その候補地を絞るのは難しい。

一方レシュニクの推すタイワラについては、上に述べた条件からは外れてしまうし、それがゴール朝以前のゴールの中心地であり、マスワードによって破壊された WY, TWR ではないかとの先述の推定が成り立つならばフィールズクーフには当たり得ないことになる。

む す び

冒頭にかかげた、地理的政治的状况からゴール朝の特性に光をあてる、という目的にそって本稿で述べてきた内容をまとめるならば以下の如くになろう。

(1) シャンサバーニー家のもともとの領土はヘルマンドルード上流域からハリールード上流域にかけての地にあり、フィールズクーフの位置もそのエリアに求められるであろう。

(2) シャンサバーニー家はガズナ朝の後ろ盾を得て勢力を伸ばし、やがてガズナ朝とセルジュク朝という二大勢力の衰退という状況のもと、アフガン山塊の外へ積極的に進出することで、統制に服しにくいゴールの小首長達をまとめ、ゴール朝を出現させた。

ところでアフガン山塊を巡る道とその上に位置する諸都市とを手中にしたことは、ゴール朝の支配体制のあり方に大きな影響を及ぼしたと考えられる。テュルク人ゴラーム（マムルーク）の登用である。

ゴール朝、あるいはシャンサバーニー家がいつ頃からその軍勢にテュルク人ゴラームを用い始めたのかは明らかではない。少なくともアラー・アッディーンがガズナ征服遠征の頃には、資料にテュルク系の軍勢は現れない。他方、その後ムイZZ・アッディーンがガズナ朝を追ってインドへと攻め込み戦った際、彼の軍の重要な部分をテュルク人ゴラームが占めていた。イブン・アルアスィールによれば先に触れた1187年のプリティヴィラージャとの戦いで敗れた際、重傷を負ったムイZZ・アッディーンを戦場から探し出し救ったのは彼のテュルク人ゴラーム達であった [IA: xi-171]¹⁴⁾。ゴール人の軍が我先に退却したのとは好対照である。また、ギヤース・アッディーンの後ムイZZ・アッディーンがフィールズクーフに戻って即位すると、ガズナからインドにかけての領域は彼のゴラーム出身の將軍、タージュ・アッディーン・ユルドゥズ Tāj al-Dīn Yuldiz とクトゥブ・アッディーン・アイ

14) もっとも、ジュズジャーニーによると、ムイZZ・アッディーンを助け出したのはハラジュ (khalaj) のアイヤールの勇士であったという [TN: 399]

バク Qutb al-Din Aybeg に託された。二人ともムイッズ・アッディーンによって購入され訓育されて地位を築いた將軍であるが、この二人の他にも、後にインドで勢力をなしたナーシル・アッディーン・クバーチェ Nāṣir al-Dīn Kubācha, バハー・アッディーン・トゥグリル Bahā' al-Dīn Ṭughril といった王達、スルタン達は皆ムイッズ・アッディーンに買われ、育てられた「ムイZZィー mu'izzī」ゴラームの出身であった¹⁵⁾。

一般に王朝樹立時に推進力となった勢力が、王朝成立後はその力と功績ゆえに王権を脅かす危険要素となるという図式は他のイスラーム王朝にも多く見られる。東方イスラーム世界では、サーマーン朝におけるディフカーン、ブワイフ朝におけるダイラム人、あるいはセルジューク朝におけるグズといった存在がその例としてあげられよう [清水宏祐 1972; 1975]。支配者側はそれに対するカウンターパートとしてこの時代、テュルク人ゴラームを多く採用し、王権を保障するための軍事力としたのであるが、ゴール朝においても同様の傾向が看取できるのである。

ゴラームあるいはゴラーム出身の將軍によって構成される軍隊が君主との間に固い絆を持ち、命令に忠実で非常に優秀な軍事力となり得たということは今更言うまでもない。しかし、その一方でゴラーム軍人のもう一つの特徴は極めて金がかかるということである。残念ながら当時のテュルク人ゴラームの相場を正確に知ることはできないが、清水和裕氏の研究 [1990: 5] によればマームーン、ムータスィムの時代、ゴラームは一人あたり 10,000 から 20,000 ディルハムで購入されていたという。ちなみに 11 世紀半ばのニーシャープールにおいては、パン 1 マンが 0.5 ディルハム、良好な果樹園 1 ジャリーブが 3,000 ディルハムで買ったという記録があるが [TB: 809-10]、ゴラームの金額はそれらに比しても決して安いものではない。それどころか、この当時テュルク人ゴラームは取引されていた商品の中でも最も高価なものの一つであっただろうし、特に優秀なゴラームは非常に高値で取引されたと考えられる。そのような高価なものだからこそ貴重な財産に数えられたり、君主間の贈り物として用いられたりしたのである。ところでアラビア語やペルシア語の地理書群はゴールについて「良い耕地と牧草地がある」と記しているが、ことゴールから外へともたらされる産物と言えば奴隸 (raqīq) と武具くらいなものであった [Iṣṭ.: 272; IH: 444; H'Ā: 101]。険しい山岳地帯に位置し、遠距離交易の幹線路からも外れたゴールの地に、大量のテュルク人ゴラームを購入するだけの富が早くから蓄積されていたとは考えにくい。またイクター制を導入したブワイフ朝やセルジューク朝の例に見られる如くゴラーム軍人からなる軍団の維持にも多額の金が必要であった [清水宏祐 1972]。ゴール朝がそれだけの富を手中にし得たのは前章で指摘したようにアラー・アッディーンの征服活動以後のことと考えるのが自然である

15) ジューズジャーニーは、アイバク以降のインドの支配者について記した「第 20 タバカ」を「fi zikr al-salāṭīn al-hind min al-mu'izzīya」と題している。

う¹⁶⁾。

ギヤース・アッディーンとムイッズ・アッディーンの後、ゴールを中心とする帝国の西方領域は相次ぐ内紛の結果分裂し、最終的にホラズムシャー朝にフィールズクーフを奪われてしまう。一方帝国の東方領域すなわち北インドにおいては、ムイッズ・アッディーンの子グラーム出身の将軍がゴール朝の征服活動の成果をしっかりと受け継ぎ北インドにおけるムスリム支配を確立していった。このような大きな流れを見てもゴール朝の成立から崩壊への過程と、アフガン山塊を巡る道の支配とは極めて密接に関わっている、と言えるのではなからうか。

参考文献

- ChM: Nizāmi 'Arūḍī Samarqandī. *Chahārmaqāla*. ed. M. M. Qazwini. London, 1910. (reprinted in Tehran).
- Ĥ'Ā: anonymous. *Ḥudūd al-'Ālam*. ed. M. Stūda. Tehran, 1962.
- Historiae.: Ya'qūbī. *Historiae*. ed. M. Th. Houtma. 2 vols. Leiden, 1969.
- IA: Ibn al-Athir. *al-Kāmil fī al-Ta'rikh*. ed. C. J. Tornberg. 13 vols. Beirut, 1982.
- IḤ: Ibn Ḥawqal. *Kitāb Ṣūrat al-'Arḍ*. ed. J. H. Kramers. Leiden, 1967.
- Iṣṭ.: al-Iṣṭakhri. *Kitāb al-Masālik wa al-Mamālik*. ed. M. J. De Goeje. Leiden, 1967.
- KY: Abū Naṣr Muḥammad al-'Utbi. *Kitāb al-Yamīnī*. In: Šaykh Manīnī's *al-Faṭḥ al-Wahbī*. 2 vols. Cairo, 1869.
- MA: Muḥammad b. 'Alī Šabānqāra'ī. *Majma' al-Ansāb*. ed. M. Ḥ. Muḥaddith. Tehran, 1985.
- Muq.: al-Muqaddasī. *Aḥsan al-Taqāsīm fī Ma'rīfat al-Aqālīm*. ed. M. J. De Goeje. Leiden, 1967.
- TB: Abū al-Faḍl Bayhaqī. *Tārikh-i Bayhaqī*. ed. 'A. A. Fayyāḍ. Mašhad, 1977.
- ṬN: Minhāj al-Dīn Jūzjānī. *Ṭabaqāt-i Nāširi*. ed. 'A. Ḥ. Ḥabībī. 2 vols. Kabul, 1963.
- TTY: Nāsīh b. Ḥafṣ Jurfādaqānī. *Tarjama-yi Tārikh-i Yamīnī*. ed. Ja'far Ši'ār. Tehran, 1966.
- Yāqūt: Yāqūt al-Rūmī. *Mu'jam al-Buldān*. Beirut. 5 vols. 1979.
- Adamec, L. W. (1975) *Historical and Political Gazetteer of Afghanistan: 3 Herat*. Graz.
- Allchin, F. R. & N. Hammonds (eds.) (1978) *The Archaeology of Afghanistan*. London.
- Ball, W. (1982) *Archaeological Gazetteer of Afghanistan*. 2 vols. Paris.
- Bombaci, A. (1957) Ghazni. *EW* 8, 247–259.

16) アラー・アッディーンがガズナ征服を終え、スルタン・サンジャルとナーブの地で戦った時には、ゴール軍の右翼にグズ、テュルク、ハラジュの兵がいた、との記録がある〔ṬN: 346〕。またギヤース・アッディーンがスルタンとなった頃、フィールズクーフの宮廷にはテュルク人の側近 (turkān-i khwāṣṣa) がいたとの記録がある〔ṬN: 355〕。これらはアラー・アッディーン時代にテュルク人グラームの獲得、購入がすすんだことを示す事例と言えるかもしれない。

- Bosworth, C. E. (1961) The Early Islamic History of Ghūr. *CAJ* 6, 116 – 133.
- Bosworth, C. E. (1968) The Iranian World (A. D. 1000 – 1217). In: Boyle, J. A. (ed) *The Cambridge History of Iran* 5. Cambridge. 1 – 202.
- Bosworth, C. E. (1973) *The Ghaznavids* (2nd ed.). Beirut.
- Bosworth, C. E. (1977) *The Later Ghaznavids*. Edinburgh.
- Bruno, A. (1963) Notes on the Discovery of Hebrew Inscriptions in the Vicinity of the Minaret of Jām. *EW* 14 (3-4), 206 – 208.
- Dupree, N. H. (1977) *An Historical Guide to Afghanistan*. Kabul.
- Fischer, K. (1969) Preliminary Remarks on Archaeological Survey in Afghanistan. *Zentralasiatische Studien* 3, 327 – 408.
- Ḥabībī, ‘A. Ḥ. (1971) Taḥqīq-i barkhī az amākin-i Tāriḫ-i Bayhaqī. *Yād-nāma-yi Abū al-Faḍl-i Bayhaqī*. Mašhad. 137 – 152.
- Herberg, W. (1976) Topographische Feldarbeiten in Ghor: Bericht über Forschungsarbeiten zum Problem Jam-Ferozkoh. *Afghanistan Journal* 3-2, 57 – 69.
- Holdich, Th. (1910) *The Gates of India: Being an Historical Narrative*. London.
- 稲葉 穰 (1990) セルジューク朝と後期ガズナ朝——その国境地帯について——『東方学報』京都 62, 637 – 673.
- 稲葉 穰 (1991) 七一八世紀ザブリスターンの三人の王『西南アジア研究』35, 39 – 60.
- 稲葉 穰 (1994) ガズナ朝の「王都」ガズナについて『東方学報』京都 66, 200 – 252.
- 岩村 忍 (1978) 『アフガニスタン紀行——モゴール族の村を求めて』(現代教養文庫 963) 社会思想社.
- Janata, A. (1971) On the Origin of the Firuzkuhis in Western Afghanistan. *AV* 25, 57 – 65.
- Kästner, H. (1968 – 69) Ruinen alter Wehranlagen Westlich Šahrak in der Provinz GHOR, Afghanistan. *CAJ* 12, 269 – 279.
- Kieffer, Ch. (1961) Les Ghorides, Une Grande Dynastie Nationale. *Afghanistan* 16 (4), 37 – 53.
- Kieffer, Ch. (1962) Les Ghorides, Une Grande Dynastie Nationale, Iie partie. *Afghanistan* 17 (1), 10 – 22.
- Kohzad, A. ‘A. (1953) Along the-Koh-i Baba and the Hari Rud, Part IV. *Afghanistan* 8 (4), 54 – 65.
- 桑山正進 (1991) ガネーシャ神像碑銘にみえるカーブル突厥王の編年『西南アジア研究』35, 22 – 38.
- 桑山正進 (1993) 6 – 8 世紀 Kāpīsi-Kābul-Zābul の貨幣と発行者『東方学報』京都 65, 381 – 430.
- Le Berre, M. (1987) *Monuments pre-islamique de l’Hindukush central*. *MDAFA* 24. Paris.
- Leshnik, L. (1968 – 69) Ghor, Firuzkoh and the Minar-i Jam. *CAJ* 12, 36 – 49.
- Maricq, A. et G. Wiet (1959) *Le Minaret de Djam*. *MDAFA* 16. Paris.
- Marquart, J. (1901) *Ērānšahr*. Berlin.
- Marquart, J. & J. J. M. de Groot (1915) Das Reich Zābul und der Got Žūn vom 6-9.

- Jahrhunderts. In: Weil, G. (herausgeben) *Festschrift Edward Sachau*. Berlin.
- Minorsky, V. (tr.) (1982) *Ḥudūd al'Ālam: Regions of the World*. ed. C. E. Bosworth, Cambridge.
- Nāẓm, M. (1971) *The Life and Times of Sulṭān Maḥmūd of Ghazna* (rep ed). New Dehli.
- Raverty, H. G. (tr.) (1979) *Ṭabaqāt-i Nāṣiri: A General History of Muhammadan Dynasties of Asia* (rep ed). 2 vols. New Delhi.
- Scarcia, G. (1965) Sulla Religione di Zābul. *Annali* 15, 119 – 165.
- Scarcia, G. & M. Taddei (1973) The Masḡid-i sangī of Larvand. *EW* 23 (1-2), 89 – 108.
- Shafi, I. M. (1938) Fresh Light on the Ghaznavids. *IC* 12, 189 – 234.
- 清水和裕 (1990) 9世紀アッバース朝のアトラークと奴隸軍人『史学雑誌』99 (6), 1 – 37.
- 清水宏祐 (1972) ブワイフ朝の軍隊『史学雑誌』81 (3), 66 – 91.
- 清水宏祐 (1975) イブラーヒーム・イナールとイナリヤーン『イスラム世界』10, 15 – 32.
- 梅棹忠夫 (1956) 『モゴール族探検記』岩波書店.
- Vercellin, V. (1976) The Identification of Firuzkuh. *EW* 26 (3-4), 337 – 340.

(龍谷大学国際文化学部)